第 19 回日本映画祭

10 月 13 日から 30 日まで（合計 7 日間）、第 19 回日本映画祭が、エレバン、カパン、ディリジャンの 3 都市で開催されました。国際交流基金の協力により、日本社会や芸術的表現のさまざまな側面を代表する 3 本の名作が上映され、開会以来、多くの観客を魅了しました。

シリーズの幕開けはエレバンのモスクワ・シネマで行われ、青木・駐アルメニア日本国大使が開会の挨拶を述べました。青木大使は、アルメニアの観客による日本文化への継続的な関心に感謝の意を表し、映画が両国間の相互理解を深めるうえで果たす役割を強調しました。16 日からはシネマ・ハウスで特別上映が行われ、アルメニア人映画監督ミカエル・ドヴラチャン氏が登壇し、文化協力や映画が日本とアルメニアの芸術的絆を強化するうえで果たす重要性について自身の見解を語りました。カパンでは、シュニク・シネマで上映会が行われ、穴澤参事官が開会の挨拶を行いました。また、ハルチュニャン・シュニク州副知事が登壇し、文化交流の価値を強調するとともに、日本が地域の文化活動に継続的に関わっていることへの感謝を述べました。映画祭の最終上映は、ディリジャンの TUMO センターで行われ、温かく感動的な雰囲気の中で幕を閉じました。

この映画祭は、日本とアルメニアの文化交流を促進し、日本映画への理解と関心を高めることを目的としています。アルメニアの観客にとって、日本の映画監督たちによる独自のストーリーテリングと映像表現を体験する貴重な機会となりました。ご協力くださった共催機関の皆様に感謝申し上げます。

青木大使による開会挨拶

エレバンでの上映会

ドヴラチャン氏とシネマ・ハウスにて

カパンでの上映会